

此の岸より想う

上井 梨里佳

夢の中へと落ちかけていた意識が浮上する。背中が焼けるように熱い。電車の窓から打ち掛かる日差しはまだ夏が人々を手放さんと主張するような強さだった。私が微睡む前は日差しから逃れようとしても反対側の座席には人がずらりと座っていて叶わなかったが、今ではそれが嘘のようになり車内はがらんとしている。私と小太りの老爺、そして化粧を直す女性がいるばかりだ。確か数駅前が大きな駅だから、みんなそこで降りていったのだろう。この先はもう地域住民とその居宅くらいしかない。好んで行こうとする者も少ないというわけだ。電車は小さな駅で停まって、化粧をやめた女性が改札へ小走りで向かう。電車がまた動き出すと、車内は私と老爺二人だけになった。しばらく車内案内表示装置を眺めていた私は、ふと老爺の視線の先が気になって

追　　う　　。　　旅　　行　　、　　経　　済　　、　　転　　職　　、　　ゲ　　ー　　ム　　ア　　プ　　リ　　。　　車
内　　に　　は　　つ　　い　　目　　を　　留　　め　　て　　し　　ま　　う　　よ　　う　　な　　車　　内　　広　　告
が　　並　　べ　　て　　あ　　る　　が　　、　　老　　爺　　は　　そ　　の　　う　　ち　　一　　点　　を　　見　　つ
め　　て　　い　　る　　。　　そ　　れ　　が　　ち　　ょ　　う　　ど　　私　　の　　横　　に　　貼　　っ　　て　　あ
る　　も　　の　　の　　よ　　う　　で　　、　　そ　　の　　視　　線　　が　　自　　分　　に　　寄　　越　　さ　　れ
て　　い　　る　　気　　が　　し　　て　　な　　ん　　だ　　か　　変　　な　　気　　分　　だ　　っ　　た　　。　　振
り　　返　　っ　　て　　横　　の　　広　　告　　を　　見　　て　　み　　る　　と　　、　　そ　　こ　　に　　は　　赤
や　　橙　　な　　ど　　の　　暖　　色　　が　　乱　　雑　　に　　塗　　ら　　れ　　た　　画　　面　　中　　央　　に
白　　を　　ベ　　ー　　ス　　に　　し　　た　　少　　女　　が　　描　　か　　れ　　て　　い　　る　　迫　　力　　の
あ　　る　　イ　　ラ　　ス　　ト　　が　　あ　　っ　　た　　。　　右　　下　　に　　は　　聞　　き　　覚　　え　　の
な　　い　　大　　学　　名　　と　　、　　住　　所　　や　　ホ　　ー　　ム　　ペ　　ー　　ジ　　が　　記　　載　　さ
れ　　て　　い　　る　　。　　芸　　術　　の　　専　　門　　校　　の　　広　　告　　の　　よ　　う　　だ　　。　　老
爺　　が　　大　　学　　に　　興　　味　　の　　あ　　る　　よ　　う　　に　　は　　見　　え　　な　　か　　っ　　た
が　　、　　こ　　れ　　ほ　　ど　　目　　を　　引　　く　　広　　告　　を　　見　　れ　　ば　　そ　　れ　　も　　顔
け　　る　　。　　私　　は　　胸　　の　　奥　　が　　ち　　り　　り　　と　　痛　　む　　の　　を　　感　　じ　　て
そ　　の　　広　　告　　か　　ら　　目　　を　　離　　し　　た　　。　　電　　車　　が　　ど　　こ　　ま　　で　　走
っ　　て　　も　　、　　日　　差　　し　　は　　私　　を　　離　　し　　て　　は　　く　　れ　　な　　い　　。　　し
か　　し　　、　　反　　対　　側　　の　　座　　席　　に　　移　　動　　す　　る　　気　　に　　は　　な　　れ　　な
か　　っ　　た　　。　　気　　を　　紛　　ら　　わ　　せ　　よ　　う　　と　　し　　て　　車　　窓　　に　　映　　る
先　　ほ　　ど　　か　　ら　　変　　わ　　り　　ば　　え　　し　　な　　い　　景　　色　　を　　眺　　め　　て　　は

、

ここはあの地区のこのあたりだろう、と、頭
の中で地図を展開する。いつもならここを通
る頃は電車の心地良い揺れに身を任せて船を
漕いでいるから、単調でも物珍しかった。過
ぎ去っていく木々の葉は、青々とうるさいく
らいに命を主張する。しかし時折色あせてい
るものや赤く変色しかかっているものも通り
過ぎていって、やはり夏は終わりに向かって
いるのだと思わされた。毎年この時期になる
と友人と共に秋なんてないじゃないかと誰に
向かっているでもない文句を垂れていたが、
案外秋はきちんと顔を出していたのかもしれ
ない。郷愁に駆られていると車窓の景色はや
がて一変して、開けた見晴らしのいいものと
なった。線路を取り囲む家並みのむこうには
皓々と太陽の光を反射して揺れる海が広がっ
ている。それらが私にもうすぐ駅だと知らせ
てくれた。

長い間体を預けていた座席に別れを告げプ
ラットホームに降り立つ。家々の間からのぞ

く海は先ほどの車内で見た時より間近だ。周
囲に誰もいないのをいいことに、鼻腔をくす
ぐる潮風を胸いっぱい吸い込む。もう何度
目かわからないくらいにはこの駅に訪れてい
るが、行く度この景色に感動させられていた
海など気軽に行けない場所です。育ったためだろ
うか。目の前に広がる群青に強烈な憧れを抱
いているのは否めない。いつかは海の近くに
居を構えたいな、と独り言ちると、小さく首
を振って駅舎を出る。ここで呆けている暇は
ないのだ。人を待たせているのだから。
「久しぶり知子。これで五回目だね」
私は手を振って歩み寄った。知子は私の小
学校からの一番の友人だ。高校が分かれた後
もお互いを訪ねてよく遊ぶ程の仲で、今では
時間ができた時に私が知子の所へ通っている
「ああ、もうこんなに汚くなっちゃって。あ
んたのお父さんとお母さんが来る前に私が粗
方片付けちゃうからね」

知子のお父さんとお母さんが来るのはもう少し先だと決まっているから、その前に私が知子の身の回りを掃除する。知子は小学校の時からずっと無口だ。学校の発表などではき喋っていたため人前で話すのが苦手なのはきではないのだろうが、常は他人の言葉に對してはちょっとしたした表情の変化で答えるだけだった。それにしてもずっとこっちに來れなくて「めんね。大学卒業したらすぐ行こうと思っただけだった。」

知子に笑いかけてきぱきと手を動かしながら知子に「さあ、もう一年ぶりだね。あははは」

が通っていた小学校に三年生の時に転校してきたのがこの明智知子だ。田んぼだらけの田舎に転校生だなんて非常に珍しいことで、誰も知子に興味津々だった。私も例に漏れずクラスの新入りへの関心は尽きなかったが、

露骨に接しては新しいものの好きの思慮の浅い奴だと思われてしまふと考え、知子を囲む輪の中には入らなかつた。驚いたのはその日の帰りのことで、一緒に下校する友人といつもの角で別れ自宅への道を急いでいたとき、知子とばったり会つたのだ。話しかけてみると彼女は首を傾げたり微笑んだりするばかりでなかなか返事をしないため、私が一方的に話しているのがなんだか不思議だつたのを覚えのすぐ近くであることがわかり、私達は共に登下校をすることと約束した。私と知子が仲良くなつていったわけはここにある。数日経てばクラスメイトへと変化して、既に転校生からクラスメイトへと変化して、本人の無口な性格も手伝つて転校初日のような賑わいを知子の周りで見かけることはほとんどなくなつていた。その分知子は私や友人と行動する時間が増えていき、幼いながらも頼られてい

尊心をふくらませていた。そんな中知子の周りがまた賑わうようになったのはそれから一月後のことだ。その日は二週間に一度の図工の授業がある日で、筆を使って板材に絵を描くことになっていた。慣れない筆遣いに苦戦しつつも思い思いに描写していた折、図工室の一角から「わあ、知子ちゃんすごいね」との声が挙がった。気になってそちらを見たのは私だけではなかったように、知子とその隣に座っているクラスメイトは皆の視線を浴びることもとなった。知子の隣のクラスメイトが知子の手元を凝視して目を輝かせているのを見て近くの男子生徒も同じようにのぞきこんで感嘆の声をもらす。それに続いて我も我もと皆席を立て知子の方へ集まっていた。私も遅れて立ち上がり人混みの中のぞいてみると、知子の手元にある板材には尾羽を美しくなびかせながら舞っている真っ赤な鳥が描かれていた。一筋一筋微妙に違った色で塗られていて、同じ年の人間が描いたとは思えない

いほど精妙で優美な作品だ。それを見たクラ
スメイトは口々に賞賛の言葉をかけるため息
をこぼすと、満足するまで眺めて自分の席へ
戻っていった。動けなかったのは私だけだ。
知子の絵を一目見た瞬間、鈍器で殴られたか
のような衝撃が走った。私は数秒の間意識を
失っていたいたような気さえた。知子によつて
描かれた猩々緋の中に潜む黄金の瞳が私を捕
えて放さなかった。あんまり見入っていたも
のだから、視線に気付いた知子とその隣のク
ラスメイトが振り返った。クラスメイトはま
ばたきもしないような私に共感の意を述べ興
奮気味に騒いだが、無口な知子はそうしなか
った。ただ私がこの大鳥に魅せられたのが理
解できたのかでしかなかったのか、照れたよう
にこりとするだけだ。それを視界の端に捉
えた私ははっとして、なんだか恥ずかしくな
って自分の席へと小走りで戻っていった。あ
れでは不審者のようだったな、と今更ながら
に恥ずかしい。ともかくこれが知子が皆の注

目を浴びる二度目の出来事であり、私が知子の密かな信奉者になる事件だったのだ。める。視線を上げて知子を見るが、知子は喋らない。私も黙々と知子の身の回りを掃除していたためこの場はとても静かだった。そよそよと流れる風の音ばかり聞こえる。それでも苦ではないのだ。長い時を共に過ごした私達の間には独特な了解がある。そして私は今でもそれを引っ張っている。「ここところセミの声も少なくなってきたよね。最近までうるさいったらなかったのに。知子とは正反对だよ。ふふ」

はまだ夏だった。着々と季節を変えていく地上とはちぐはぐだ。ふと視線を下へとずらせば知子がいる。私は目を閉じた。

幼い頃から時々遊びに行っていた私の叔父は熱狂的なまでの絵画コレクターで、名画からは無名の画家の作品まで気に入ったものを集

めては家に飾って眺めるのが趣味だ。私はそんな叔父の絵画への熱弁を永遠と聞いているのが大好きだったためある程度の知識は持っている。あった。だからこそ、知子の腕がどれ程凄まじかったのかわかる。小学三年生の例の出来事から私の知子への見方は大きく変化した。転校してきたばかりで同じクラスの者以外と接触の少ない知子とはとにかく私や友人について回っていたため、私は知子のことを頼りなく、自分が先立ってやらねばならないと考え、自己を転じて心に憧憬の念が顔を現し始めたのだ。傍らから見れば私たちの関係は変わらず知子が私を追いかけようものであったろうが、心象面では私が知子を追いかける形になっていく。知子も知らない私だ。けの秘密だ。一方で知子もあの時の私の反応が気に入ったのか、自分で納得のいく作品ができてあがると毎度私に見せに来ていた。私はそれがとても嬉しくて、知子がキャンバスや

紙を持って肩を叩く度にたまらなく幸せな気分になり、自然と口元が緩むのだ。また、知子は時々絵の制作を見せるために自分の部屋に私を招き入れてくれることがあった。始まりは私が知子に絵を描いているところを見た。いと云ったことだったが、その後も知子は気まぐれに誘っては自室でキャンバスと向き合っていていた。その間、私は喋らずにただ知子や知子によって落とされる極彩色を見つめた。集中している知子の邪魔をするのは忍びないという理由もあったが、それ以上に静かな部屋でそうしているのが好きだった。そこでは私はじっと黙っているのに筆を持った知子の顔は話しているより雄弁に心情を語るから、いつもとは逆になったみたいだった。しかしそれもまた心地良かった。

それを描く世界はとても独特だ。これを言うとき知子を知るクラスメイトはそうだ。ろうかと首を傾げる。明智さんの描く絵ははっきりにして、十人いたら十人が上手い

と 言 う よ う な 絵 だ と 、 そ う 言 う 。 確 か に 知 子
の 描 い た 真 っ 赤 な 鳥 の 絵 な ど は 線 が く っ き り
と し て い て 全 体 的 に シ ャ ー プ な 印 象 が あ る 。
し か し 、 こ う い っ た 絵 は 知 子 の 本 領 で は な い
の を 私 は 知 っ て い る 。 普 段 ク ラ ス メ イ ト や 先
生 の 前 で 描 い て み せ る 作 品 は 言 わ ば 知 子 の 化
け の 皮 で 、 お 利 口 な 姿 を し て い る 。 し か し 本
質 は も っ と 狂 気 的 で 情 熱 的 な 、 雑 で 汚 い と 評
さ れ て し ま う こ と も あ る 常 人 に は 理 解 で き な
い よ う な も の だ 。 知 子 は こ れ を 学 校 な ど で 描
く こ と は な い 。 ど う や ら そ れ は 自 室 で 真 っ 白
な 紙 面 と 向 か い 合 う 時 の み に 実 現 す る よ う だ
っ た 。 し か し そ の 片 鱗 は 普 段 の 絵 や イ ラ ス ト
か ら 見 て と れ る 。 事 実 私 を 一 目 惚 れ さ せ た 大
鳥 の 真 っ 赤 な 羽 一 つ 一 つ に は 知 子 の 狂 気 が 紛
れ 込 ん で い た 。 赤 を 中 心 と し た 橙 や 黄 な ど の
全 て 異 な る 色 を あ る 時 は 一 つ 一 つ 丁 寧 に 、 ま
た あ る 時 は 心 の 趣 く ま ま 激 し く 塗 り 込 ん で い
く の が 知 子 の 特 徴 だ っ た 。 一 見 す る と た だ の
赤 い 画 面 だ が 、 し ば ら く 眺 め て い る と 配 置 さ

れた微妙に違った色の具合から何かが立ち現
れてくる。それは鑑賞する者の心象であるよ
うに思えるし、描き手の知子の心象であるよ
うにも思えた。知子のあの大鳥の絵に魅せら
れたのは、そこに見え隠れする知子の本質に
触れたからではないかと今ではそう思うし、
もしかしたら知子もあの時それに勘付いてい
たのかもしれない。そうやって私達はお互い
に最高の画家と最高の鑑賞者であり続けた。
それは年を経て初めての制服に身を包んでか
らも変わらず、今のようにセミが姿を消し始
めたある日にも、私は常のように約束の時間
に知子の部屋へと向かった。できてから十年
と経って知らない知子の家は、知子のにおいと
新しくできた家のにおいが混ざっていて面
白い。ダークブラウンのフローリングを進み
突き当たりのドアを叩いて一言声をかけるが
返事はなかった。日頃からそんなことはよく
あることだから気にせずドアノブに手をかけ
る。が、数センチ開いたところで中の様子が

おかしいことに気付いた。鼻の奥を刺激する
独特なおい。知子が絵を描く時に使う画材
のにおいだ。制作過程を見せてもらうときに
はこうしたにおいが出てしまうのは仕方ない
から気にしていないが、あまり良い香りでも
ないから普通に遊ぶときは知子が気を遣って
においを消してくれている。今日は絵の制作
を見せてもらいに来たわけではないからうっ
すらと漂ってくる程度ならまだしも、こんな
に強烈に香りが残ることはないはずなのだ。
不審に思っている中に入ると、むわりと暖かい空
気が私を包み込んだ。
その日は朝何気なく見ていたニュース番組
で真夏日になる地域があると言っていた。気
温を測ってはいないけれど、立っているだけ
で噴き出してくる汗を見れば瞭然だろう。そ
んな日に、まさか全ての窓を閉めきって空調
もつけずにいる者があろうとは、部屋の中
こもった熱気と充満する画溶液のにおいで入
ってすぐの私の頭は既にくらくらしている

赤に好奇心がそそられて製作途中の作品を盗筆を拾い集めていく。ふと視界の端に映ったに軽く笑いながらイーゼルの前に散らばったから私も手伝った。なかなか知らない知子の失敗も頭を下げてから慌てて画材を片付け始めたてしまったら大変だろうと叱りつけたら何度いからという理由だった。それで知子が倒れさの中でやらなければイメージを形にできないするため、冷房をつけなかったのはこの暑しい。窓を閉めきっていたのは外の音を遮断うやら朝から時間も忘れて書き続けていたらさそうに眉尻を下げるから驚いたものだ。ど上げて私と目を合わせると、途端に申し訳なのようににはたと手を止めた。ゆっくり視線をそうすれば知子はやっと意識を取り戻したかしくて、窓を開け放つと彼女の肩を揺らした暑さを感じていないようなその姿が逆に恐ろた。私の訪問には一切気付いていないようだ。たキャンバスを前に一心不乱に筆を操っていた。いうのに。知子を見れば、イーゼルに置かれ

。

。

み見た。その瞬間、私は言い知れぬ何かで体が凍りついた。いつものより少し大きいキャンバスに色とりどりの赤、赤、赤。そして、その画面中央に小さく描かれた真っ黒な何か。何かを型取っているのかはわからないが、確かにそれは何かを描くような線となっていた。それを見ていると腹の奥から恐怖を叫ぶ声がする。描かされた黒が化物のような形をしていて怖い、という単純な恐怖ではない。いつも知子が描いている美しく鮮やかな世界に突如現れた闇が周りの色に手を伸ばして溶け込むように滲んでいるのが怖い。一度だって情熱的な朱の世界に寒々しい色などを入れたことのない知子が初めてこの色を許した。それが怖かった。しかし、その意味を考えている余裕はなかった。た。いつの間にか隣で私の顔を見ていた知子に對して体裁を整えるので必死だったのだ。知子は表情だけで「この絵はどうだ」と伝えにくる。私はびっくりしてまぬけな声をもら

は私の様子がおかしいことに薄々気付いてい
知子との距離をはかりかねていた。鋭い知子
ように感じたからだ。私はそれ以来しばらく
となく、知子の触れてはいけない側面である
それについて直接きくことはなかった。なん
に影が差すのを私は見逃さなかった。しかし
友人と和気藹々としていたが、時折彼女の顔
せていた知子はそれから変わらずクラスの
ただ無口なだけで人並みの明るさを持ち合わ
現れたのはこの時からだったような気がする
今思い返してみれば、知子の異変が表面に
息をつくと嬉しそうに笑顔を見せた。
だと讚えた。すると知子は安心したのか一つ
ここにことして、いつもながら素晴らしい出来
などで知子を褒めるクラスメイトのようにに
暗に怖いというわけにもいくまい。私は学校
ていなくて不安なのだろうか。そう思えば無
テイストの違う作品だから完成形がまだ見え
求めてきたことがなかったからだ。いつもと
してしまった。なぜなら知子は今まで感想を

、

。

ただろうが、何も言わずにいつも通り接した
私にはそれが尚更気まずくて増々距離をつか
むのが難しくなったのは言うまでもないだろ
う。ある日、珍しく知子が製作途中の絵を見
てほしいと私を誘った。私には断る理由など
なかったから二つ返事で承諾した。例の絵を
見てから知子の部屋に行くことがなかった私
は知子の言う製作途中の絵がああのような
不気味なものだったらと身構えていたがそれ
は杞憂だったようで、足を踏み入れた知子の
部屋にはいつもの通り美しい朱が塗られた描
きかけのキャンバスがあった。その時の私は
誰が見てもわかるほど表情が緩んだだろう。
私を部屋に入れた知子は徐にキャンバスの前
へ進みでてまじまじとそれを眺めていた。い
つものならキャンバスの前に座って筆を持つ
にと不思議に思っているところ、知子はキャンバ
スから目を離さないままただ一つ「悩んでい
るの」とこぼした。その声がとても小さかつ
たから一瞬何を呟いたかわからず聞き返した

するともう少し大きな声で「描いていると苦しくなる」と返ってきた。その時私はこれまでの違和感に合点がいった。知子は絵のこと、何か壁に出くわして落ち込んでいたのだ。所謂スランプというやつだろう。私がああ黒に恐怖を抱いたように、知子も自分がつけ足した何らかの像に違和感を抱いていた。しかし彼女は、どうしてもその像を絵の中に落とし込みたくて悩み、それが時折表情に現れていたのか。知子がこちらと目を合わせないため知子の考えは読めなかったが、そうに違いなし、そう思うと自然と私の中にあった言い知れぬ不安は消えていった。私は知子の方へ歩み寄り彼女の手を包む。「私は知子が描く絵はどんなものだって好き。知子のやりたいようにやってみなよ」と励ました。私は知子の鮮烈な赤い作品が醸す情熱的な世界観が大好きだが、知子が自らその殻を破り新しい世界を切り開いていくのなら、明らかな異物に感じた表情

現にももう何も言うことはなかった。知子は私の言葉に少し呆気にとられていたが、私の大真面目な様子に笑いだした。その顔に曇りが無いことにほっとして、私も同じように笑った。

「あ、そういえば知子、唯衣って覚えてるでしょ。中学まで仲良かった子。あいつ今どこにいるか知ってる？ オーストラリアだよ。なんか留学先で恋人ができたらしくてそのままあっちで生活してるみたい」唯衣は私と同じく知子が転校してきてから知子と仲良くしていた友人だ。知子との出来事を思い返していたらふと彼女のことも思い出していれば話題にしていた。唯衣は私と同じ高校に入っただけから今でも連絡を取り合っているが、知子とは別の高校になっってしまった。たから知子は現在の唯衣を全く知らないだろう。う。入学したばかりの頃は私も含めて一緒に遊んでいたものの、高校生初めての秋頃から

そういった交流が減ってしまった。向き合った私と知子の間にさやさやと心地良い風が流れる。まだ夏らしい気温で流れた汗を乾かすようだ。そう、こんな風。こんな風を感じながら、高校の帰りであたり会った私達は路についていた。唯衣と別れる角に近付いた時、唯衣はなんの脈略もなく自分も知子の絵に興味を持っていたことを打ち明けた。知子も、その隣を歩いていたら私も突拍子もない告白になんともいえない呆けた顔をしたのを覚えていた。唯衣は前々から私が知子の絵を見て知っていることを知っていた。習い事に知子の家へ通っていることを知っていた。自分も見たいと言うことはなかった。や塾で忙しかったから私のように知子の部屋に入り浸ることにはできなかったという理由もあったかもしれない。しかし用事があったて役所に行った時、学生向け絵画コンクールで金賞をもらった知子の作品をたまたま見つけ惚れ込んだらしい。絵画コンクールに出した作品というところ、森の草むらの景色を描いたも

の。この数ヶ月前に知子が草や蝶や茸など
をかたどった画用紙を指定の紙にはりつけ、
その上からいつものように赤や黄を色付けし
ていったのが珍しく感じたのを思い出した。
一見するとデザイン性がありパキツとした印
象を受けるが、美しい色の配置がその場の生
物を本当に生かしているかのようにで息を呑む
作品だった。コンクールで金賞をもらったこ
とは知らなかったが、あの作品ならそれなり
の評価を受けるだろうと考えていたし、唯衣
が市役所でそれを見たなら興味を持ってい
ることを告白するに至ったのにも納得がい
った。私は私以外にも知子の才能の虜にな
った者が現れて胸が躍るような心地になっ
た。だから唯知子の描いた絵を見せてほし
いと願い出た。唯衣に難色を示した知子
をどうにか説得して、帰宅後、知子の家
に集まることになった。普段一人で訪ね
る家に唯衣が一緒にいることが新鮮で、
あの時はインターホンを押す指が震え
た。少し間をおいて玄関から知子が手招
き

の	様	い	も	作	枚	て	み	キ	た	の	ト	確	具	の	き	か	キ	唯	を
喝	子	た	唯	品	見	あ	寄	ャ	。	部	リ	か	の	が	つ	し	ヨ	衣	す
采	で	分	衣	も	せ	っ	っ	ン	そ	屋	エ	に	チ	わ	い	か	ロ	は	と
を	拍	を	も	あ	て	た	た	バ	ん	を	ミ	知	ュー	か	に	っ	キ	初	、
浴	手	全	目	る	い	キ	唯	ス	な	見	た	子	ブ	る	お	。知	ヨ	め	私
び	し	て	を	。	っ	ャ	衣	の	唯	時	い	の	な	唯	い	知	と	知	達
た	た	見	奪	一	た	ン	の	束	衣	は	で	部	ど	衣	は	子	し	子	は
知	。	せ	わ	つ	中	バ	様	取	も	わ	お	屋	を	は	な	の	て	の	軽
子	私	終	れ	一	に	ス	子	り	知	く	し	は	興	イ	く	部	い	家	い
は	も	え	て	が	は	を	を	出	子	わ	ろ	誰	味	ー	て	屋	て	へ	調
照	そ	と	い	美	私	紙	確	す	が	く	い	か	深	ゼ	唯	は	、	入	子
れ	れ	、	っ	し	が	芝	認	と	ク	し	。	自	そ	ル	衣	い	そ	る	で
く	な	唯	。	く	見	居	し	目	ロ	た	私	室	う	や	に	つ	れ	か	階
さ	ら	衣	知	鮮	た	の	た	を	ー	か	も	と	に	机	気	も	が	ら	段
そ	う	は	子	や	こ	一	知	輝	ゼ	ら	初	い	眺	の	を	よ	な	時	を
う	。	興	が	か	の	枚	子	か	ット	理	め	う	め	上	遣	り	だ	々	駆
に	二	奮	持	で	な	一	は	せ	か	解	て	よ	て	の	っ	画	か	周	け
す	人	し	っ	、	い	枚	重	て	ら	で	知	り	い	絵	た	材	お	り	た
と	分	た	て	私		一	ね	歩		き	子	ア	た	の	の	の	を		。

キャンパスの束を元に戻し、感想を言い合う私達を黙って見ていた。しばらくすると知子のお母さんが三人分の飲み物とお菓子をのせた盆を持ってきてくれて、それを受け取るために知子が立ち上がった。私達もおしゃべりをやめる。一言二言軽く言葉を交わして知子のお母さんが去っていくと、知子は盆を置くための小さな机を取り出そうとしたから私も立って知子を手伝った。折りたたみ式の机の足を伸ばしていった時、唯衣が壁際の棚に向かっている背中が見えた。四つ足全てを伸ばし終えて立たせてやると、私は唯衣の方を向いた。ちょうどその時唯衣がおおと声をあげるものだから知子も視線を盆から唯衣へと向けた。唯衣は棚の横に立ってかけてあったキャンパスの一枚を腕に抱えて眺めていた。制作途中のものでなければ知子は触ることを許しているから咎めそうになる口を閉じて何を见ているのかと問うた。すると唯衣はこれすごいよと興奮気味に表面を私に向けた。それ

が私の目に入った時、私はぴたりと動きを止めることになる。その絵には、真っ黒な像が描き出されていた。しかし、前知子が描いていたものとは別の作品のようで、それは私が見たものよりもはっきりと黒が主張している。何か赤い絵の具の海にへばりついているような絵だ。橙や黄などを目立たせるために存在しているものではなく、それらの燃え上がっているような色が主役である黒の踏み台になってるような、そんな絵。思わず目を離したくなる、しかし話してはいけないと脳が警鐘を鳴らすようなものだ。私の横に並んだ知子は唯衣の様子に少し機嫌が良いようで、わくわくとした瞳をこちらに向けてくる。私の反応も気になっていたので、以前のようにすばらしいと声をかけるべきだろうか。それでは前と同じ反応だと変に思われてしまうだろうか。知子の画風の変革を見届けると決めた私は、率直に感じたことを口にして否定することはできなかった。言いあぐねている。

と、キャンバスをこちらへ向けていた唯衣が「言葉も出ないか、わかるよ」と、感慨深く頷いてみせた。私もさっき見た時声が出ない位感動したよ。そう言った唯衣は恍惚とした表情を浮かべながら知子の絵の素晴らしいと感じたところを私に共感する形で語っていった。絵画の知識はなくとも心を動かされたのは事実のようで、拙い言葉で細部まで私達は正確には知子に聞かせた。知子にどう返せば良いか迷っていた私としては、無理に捻り出さずとも唯衣に相槌を打つ形で同調することができるから助かった気持だった。話は赤や橙などの色の配置に始まり、画面で特に目立つ存在である真っ黒な像にまで移っていった唯衣はこの黒をいたく気に入ったようで、周りの鮮やかな色との調和などを褒めた。この時、唯衣のおしゃべりを止めていればと、何度後悔したことだろう。結果的に、この日唯衣の言葉がきっかけで知子と唯衣は大喧嘩をした。唯衣が黒い像を「不気味に感じ

るけれど、鑑賞者の心に寄り添ってくれてい
るような気がして心地良い」と評した時、知
子が唯衣に掴みかかろうとしたのだ。直前知
子の周囲の空気が冷えたのを感じた私が咄嗟
に止めなければもっと大事になっていたかも
しれない。普段無口で大人しい知子が怒りを
露にしたのに私も唯衣も驚いたが、「何も知
らないくせに」という言葉で唯衣も青筋を立
て、手がつけられなくなってしまった。結局
唯衣は知子の家を後にして、二度と足を踏み
入れることはなかった。一部始終を見ていた
私は怒りのままに知子の家を出ていった唯衣
のことであり、唯衣の称賛に憤った知子のこ
とばかり考えていた。酷い奴だと自分でも思
う。しかし、知子が何故怒ったのかその時の
私には不思議でたまらなかったのだ。唯衣の
背中をにらみつけて見送った知子はしばらく
すると息を整えて私の方へ振り返った。もう
彼女の顔には怒りの感情が消えていたから一
安心したが、未だ困惑を拭うことはできない

知子には床に転がったキャンバスを手を持つと画面を私に向けて目を細めた。「これをどう思う」と聞いているのだ。私は先ほどまでいた唯衣の言葉を思い出す。彼女の言ったこと、どこが不満だったのだろうか。普通に感動して、普通に批評していただけだ。あれの何に憤怒したのだろうか。なんと答えるのが知子と巡った。私は何も言えなくなって、ただ一つ、わからないと答えた。知子はそんな私をしばらく見つめると、今度は嬉しそうに笑ったのだった。この日を境に知子と唯衣が並び立つことはなくなかった。それどころか、会話をすることもなくなくなった。あれほど大きな喧嘩をし、唯衣も互いに和解したいと思っていたのだ。知子もそれまで通り接した私は知っている。知子もいえば当然である。しかし、そのどちらともを

も あ っ た 。 二 人 の 仲 が 元 に 戻 っ て ほ し い と 願
う 気 持 ち は 私 も 同 じ だ か ら だ 。 手 遅 れ で は あ
る が 。
「 あ れ 、 も う こ ん な 時 間 か 。 久 々 に 来 た か ら
長 居 し す ぎ ち ゃ っ た な 。 そ ろ そ ろ 帰 る よ 」
電 車 を 降 り た と き は 真 っ 青 だ っ た 空 も 、 日
が 沈 ん で 西 の 方 は も う 美 し い 橙 が 染 め て い る
私 は 水 桶 や ゴ ミ 袋 を 持 っ て 立 ち 上 が っ た 。 時
期 じ ゃ な い か ら 人 気 は な い が 、 喋 っ て い る の
を 誰 か に 聞 か れ る の は や っ ぱ り 恥 ず か し い 。
「 私 も さ 、 こ こ に 来 る の は 最 後 に な る か も し
れ な い ん だ 。 仕 事 場 こ こ か ら 結 構 遠 い 所 に
な っ た か ら 。 最 後 か も っ て 思 っ た ら 、 な ん
だ か 色 々 思 い 出 し ち ゃ っ た 。 ふ ふ 」
そ う 言 っ て 硬 い 岩 肌 を 撫 で る 。 明 智 家 之 墓
と 彫 ら れ た 墓 石 は 先 ほ ど 私 が か け た 水 が 滴 っ
て い る 。 そ れ が ま る で 涙 を 流 し て い る よ う で
私 の 目 頭 も じ ん わ り と 熱 く な っ た 。
受 験 を 控 え た あ の 日 、 セ ミ が 段 々 と 姿 を 消

、

。

も、黒い絵の具ばかり減りが早くなっていた
パレットがいつの間にか鈍色に濁っていたの
のは明白だった。暖色ばかりで真っ赤だった
知子が私の前から消えてしまおうとしていた
とも後々気付いた。知子が口に出さずとも、
したから唯衣は知子を怒らせたのだというこ
いこの黒を、見る者の心に寄り添うなんて評
きた。誰にも理解されない、されてはならな
を目にするごとに、段々と私にも理解できて
だろう。知子の制作を見せてもらってあの黒
子の心に巢食う薄ら暗い何かの暗示だったの
に増えていった。あの黒い絵の具は正しく知
し、それがキャンバスを占める面積も日に日
知子の作品には必ず黒が混じるようになった
絵を見ていればそれは喉の奥へ引っこんだ。
りたい気持ちちは山ほどあったが、日頃知子
か」と返した。死んでほしくないと言ってや
それを聞いた私は、驚くでもなくただ「そっ
徐に口を開くと「私、死ぬんだ」と呟いた。
していく季節。知子は筆を持つ手を止めて、

のも。気付けたはずなのに、止められたはずなのにできなかった。私のせいだ。そうやって背中を押し続けた私が今更考え直せなんて言うことはできない。それは知子への裏切りにも近い。そうして、知子は私に宣言した。ちょうど一月後、自殺したのだ。私は知子と学校が別であつたし、受験も間近に迫つていたためその日が最後に知子と会う日になつてしまつた。だから、私は毎年この日付になる。と知子の墓参りに行くのだ。今日で五年目。五回忌となる。最後の日、別れる際に知子の影からのぞくキャンバスが驚くほど黒だつたのは正に知子の最期を物語っているようだった。私はそれを、できるだけ視界に入れないようにして歸つた。な画家だよ」

私は知子に背を向けた。背に差す夕日が焼け、そろそろ暗くなるし帰るね、と告げると、

るよ、に熱かつた。